

## 文学からの社会学——作田啓一の理論と方法

岡崎宏樹 神戸学院大学

作田啓一 [1922-] の仕事は、日本文化論、比較社会論、現代社会論、自我論、他者論、文芸批評、ドストエフスキー研究、ルソー研究、犯罪研究、現代思想研究など、社会学の領域を超えた広がりをもつが、その個性が際立つのが文学社会学の仕事であると思われる。よって、本報告では、文学社会学に関連する作品に注目することで、作田の理論と方法の独自性とその意義を（再）発見することを試みたい。

作田にとって、文学は尽きることのない発想の源泉であり、学問を駆動する力であり続けてきた。『自尊と懐疑』で示された言葉でいうならば、作田の文学社会学は、文学作品を対象に知識社会的な説明を展開する「文学についての社会学」よりも、文学を出発点として社会的思考の発見をめざす「文学からの社会学」として特徴づけられるだろう [作田・富永編 1984]。

しかし、なぜ実証的データではなく、文学というフィクションに依拠して社会学を展開するのか。その第一の理由は、作田の関心が人間の非合理的な感情や行為の理解に向けられていることにあるだろう。社会秩序は実利的な目的や価値にしたがって合理的に構成されるが、そのように合理的に構成された秩序の網目から漏れ落ちるものがある。それは非合理的にみえるが、存在のリアルな感情や生命存在としての人間の根源的な力を示している。すぐれた文学作品は〈リアルなもの〉を表現するがゆえに、実証的データではすくい取るのが難しい、人間や社会の深層を理解するのに役立つと考えられるのである。

社会的現実こそが虚構で、文学のなかに〈リアルなもの〉が描かれる。この反転した関係をみすえながら、作田の文学社会学は展開する。

戦犯受刑者の遺文を分析した「戦犯受刑者の死生観」[初出 1960：作田 1972]からはじめよう。ここで作田は、『世紀の遺書』（1953）に収められた遺文をデータとし、戦犯受刑者がみずからの死をどのように意味づけたかを分析し、そこに「自然死」型、「いけにえ」型、「いしづえ」型、「贖罪」型という4つの型が見出されることを指摘した。資料を4つの型に整理するにあたって、作田が使ったのはパーソンズの「型の変数」（業績本位—属性本位／普遍主義—個別主義）である。

注目すべきは、この論文の結びの部分に、戦犯受刑者の遺文という質的データをパーソンズの理論枠組みで分類するにとどまらない視点が示されていることである。作田は「残された課題」は、死に意味を付与する4つの型に人びとがどの程度までコミットし、どれくらい納得していたかであると論じる。「重要な問題は、彼らが語ったことよりも、語ろうとして語り切れなかったことに潜んでいる」。「最後の詠嘆までが型にはまらざるをえない悲しさ」について記すとき、作田のまなざしは「型の変数」の枠組みから「漏れ落ちるもの」に向けられている。「語ろうとして語り切れなかったこと」を読み取ろうとする作田は、対象を外側から観察し分析するのではなく、内側に入り込んで共感的に理解しようと試みている。その意味で、遺文を「文学として」読んでいるのである。この点において、論文「戦犯受刑者の死生観」は、その後の文学社会学につながる業績と位置づけることができよう。

次にとりあげたいのは作田の羞恥論である。「恥の文化再考」[作田 1967]では、「西欧は罪の文化、日本は恥の文化」という R. ベネディクトの比較論に対し、作田は、外部の視線を気にする「恥」だけでなく、状況の定義のくい違いから生じる「羞恥」も考慮すべきと反論し、日本社会に羞恥が発生しやすい社会構造の条件を考察して、それが中間集団の自立性の弱さにあると論じた。

『価値の社会学』[作田 1972]では、逸脱者—劣位者／所属集団—準拠集団の枠組みによって、罪・恥・羞恥の各概念がさらに明確に規定される。罪は逸脱者—準拠集団、恥は劣位者—所属集団と位置づけられるが、羞恥はこの枠組みにおさまらない「第三の意識」とされる。羞恥は逸脱と劣位が未分化の状態の経験であり、未分化の存在としての自己が所属集団からの視線と準拠集団からの視線の両方にさらされた時に発生するのである。

さらに、作田は、太宰治を羞恥の側面からアプローチし、「自己の内部の劣等な部分が八方から見透かされている人間、集団という甲羅の一切が剥奪され、有としての自己を主張しうる根拠を失った人間、そういう人間同士の連帯」を可能にする作用が羞恥にあると指摘する。このように太宰文学と接続することで、羞恥概念の内容が豊かになり、J-L.ナンシーの『無為の共同体』や、『アウシュヴィッツの残りもの』におけるアガンベンの「剥き出しの生」につながる論点が提示されたといえる。

『ジャン＝ジャック・ルソー』（初版 1980）で作田は、ルソーの全テキストを参照し、そこから新たな行為論を展開した。行為を導く三基準は、防衛次元－超越次元－浸透次元であると作田は論じる。ウェーバーの行為論において「感情的行為」は残余カテゴリーにすぎなかったが、文学的作品を含んだルソーのテキストに依拠することによって、作田は感情的直接性が行為や価値（理念）に有する根本的重要性を理論的に示した。ここから独自の「生成の社会学」が展開することになる。

さて、作田にとって最重要作家であるドストエフスキーがどのような社会学的想像力を喚起したのかも論じなければならないし、作田が開拓した領域を、井上俊や亀山佳明ら後の世代の社会学者たちがどのように展開したかについても言及すべきであろうが、これは当日の課題としよう。

以上を論じたうえで、本報告で考えてみたいのは、(1)「文学からの社会学」の方法論的課題、(2)「生成」「生命」「力」をキーワードに展開する作田理論の「超近代」の思想としての意義、および(3)文学や現代思想に依拠した脱領域的な思考が現代社会学になにを与えるのかといった問題である。

## 参考文献

- 井上俊, 1992, 『悪夢の選択——文明の社会学』 筑摩書房  
——, 2008, 「社会学と文学」『社会学評論』 59 卷 1 号（日本社会学会会長講演）  
亀山佳明, 2008, 『夏目漱石と個人主義——自律の個人主義から他律の個人主義へ』 新曜社  
作田啓一, 1967, 『恥の文化再考』 筑摩書房  
——, 1972, 『価値の社会学』 岩波書店  
——, 1981, 『個人主義の運命——近代小説と社会学』 岩波書店  
——, 1988, 『ドストエフスキーの世界』 筑摩書房  
——, 1993, 『生成の社会学をめざして——価値観と性格』 有斐閣  
——, 2010, 『ルソー——市民と個人』 白水社  
——, 2003, 『生の欲動——神経症から』 みすず書房  
——, 2012, 『現実界の探偵——文学と犯罪』 白水社  
作田啓一・富永茂樹編, 1984, 『自尊と懷疑——文芸社会学をめざして』 筑摩書房